

第9回「国際協力で培われたコミュニケーションスキル」

日時：7月18日(水) 午後7時～午後8時30分
会場：龍谷大学 大阪梅田キャンパス 研修室
講師：中田 豊一
特定非営利活動法人 市民活動センター神戸 理事長
URL <http://www.kobekec.net/>
特定非営利活動法人 ソムニード 共同代表理事
URL <http://www.somneed.org/>



中田豊一さんは、特定非営利活動法人シャプラニール=市民による海外協力の会駐在員や JICA 派遣専門家をはじめ、国際協力の現場で 25 年に及ぶ活動を続けてきました。現在は、(特活) 市民活動センター神戸理事長、(特活) ソムニード共同代表理事を務める傍ら、研修・調査・コンサルティングを行う参加型開発研究所を開設し*、支援現場で働く若手の育成にも力を入れています。主な著書に、『ボランティア未来論』(コモンズ、2000 年。2001 年度自費出版文化賞研究評論部門賞受賞)、『途上国の人々との話し方—国際協力メタファシリテーションの手法』(共著、みずのわ出版、2010 年) があります。

* 参加型開発研究所 <http://www.f3.dion.ne.jp/~ipdev/index.html>

講義概要

本年度前半最後の講座は、対話型ファシリテーションの基本であるコミュニケーションの技能を学びました。対人関係を築く上で欠かせないコミュニケーションの基本は、1対1の対話にあります。今回は、短いワークショップも交えながら、支援の現場に限らず職場や日常生活の中において、他者に働きかけたり、伝えたりするために必要なコミュニケーションの基本を学び理解を深めました。

【参考】ファシリテーション (facilitation) とは、「促進する」「円滑にする」という意味があり、人々の活動が容易にできるよう支援し、うまくことが運ぶように舵取りすることです。具体的には、集団による問題解決、アイデア創造、合意形成、教育・学習、変革、自己表現・成長など、あらゆる活動を支援し促進していく働きを意味します。一言でいうと、対話やワークショップを通じ、参加者の気づきを促す作業といえます。

問題の解決を見出すコミュニケーション技能とは？

私たちは、相手を支援したい、助けたいと思ったときに、「問題は何ですか?」「困っていることはありますか?」という質問をしがちです。そして、現地の人々の現実を理解し、ニーズを把握することに努めます。しかし、こうした行為のほとんどは、相手の現実を理解したつもりにはかすぎないのです。実際に中田さんが経験した次の事例が紹介されました

【事例 1】

のどかな田園風景が広がる東南アジア〇〇国の山あいの村。国際協力ボランティア団体に所属する私たちは、この村のために何ができるかを話し合うために、村人に集まってもらった。リーダーとおぼしき中年男性と私のやり取りが始まる。

私 「この村の一番大きな問題は何ですか？」

村人 「子どもの病気が多いことです」

私 「たとえばどんな病気ですか？」

村人 「一番多いのは下痢です」

私 「子どもたちが下痢になるのはなぜですか？」

村人 「清潔な飲み水がないからだと思います」

私 「水はどこから汲んでいるのですか？」

村人 「近くの池からです。森の泉まで行けばきれいな水があるのですが、歩いて1時間近くかかるので、重い水を運ぶのはたいへんです」

私 「井戸はないのですか？」

村人 「ありません」

私 「あれば便利だと思いませんか？」

村人 「思いますが、自分たちでは掘れません」

私 「どうしてですか？」

村人 「技術も、資金もありません」

私 「私たちが援助しますので、掘りませんか？」

村人 「ええ、そうできればありがたいです」

私 「私たちが支援するのは、資金と技術だけです。労働力を村から出してもらえますか？」

村人 「もちろんです」

私 「掘った後、維持管理も自分たちでやれますね？それが約束できれば、援助します」

村人 「約束します」

私 「これで決まりですね。皆さんの井戸を皆さんで掘りましょう。子どもたちも健康になるでしょう」

村人 「ありがとうございます。母親たちも喜ぶことでしょう」

私は、井戸掘りに必要な予算を調べ、村人や地域の行政と相談してこの地域に最適な井戸の掘り方を選び、そして設計図を作り上げた。こちらが提供する部分と、労働力をはじめとする村人が提供できる部分の分担も決まり、井戸掘りが始まった。こうして、村人は清潔な水を手に入れることができるようになった。

<中略>

それから1年ほど経ったある日、たまたまその村を通りかかった日本人ボランティアから耳を疑うような話を聞かされた。手押しポンプの取っ手がはずれ、今はどう見ても使われていないようだとのこと。友人の話は本当だった。取っ手の取れたポンプはくちかけていて、コンクリートで囲った水場には、土やごみが溜まり放題だった。

出典：『途上国の人々との話し方』、和田信明・中田豊一著（みずのわ出版、2010年）

中田さんは、この井戸掘りが失敗に終わるのは必然であり、援助現場における最も典型的なパターンであること述べられました。では、どこが間違っているのか？あるいは、どうすればもっとうまくいったのか？この疑問に対して本質的な答えを考えるのが今回の講座の主要な目的です。

実りのある議論とは一事実を把握するための質問

失敗に至るには多くの要素がありますが、最大の理由は、最初に示した「私」と「村人」とのやり取りに潜む決定的な誤りであると中田さんは指摘します。「原因はなんですか？」という質問自体が住民の主体性を損ない事実を覆っていたのです。では、当事者の本当の声や村の実情を把握するために、どのようなやり取りをすべきだったのでしょうか。

曖昧で一般的な質問では、その回答が事実を軸としたものではなく、応える側の思い込みや考えが強く反映されます。現実を知るには、単純な事実を積み重ねながら現実を浮かび上がらせることです。そのためには、考えを尋ねるための質問と事実を尋ねるための質問を明確に区別しなくてはなりません。援助の現場に限らず、日常生活での問題解決の場でファシリテーターに求められることの一つは、実のある議論や学びの多いやり取りに導くことです。実りのある議論とは、「事実」と「それ以外」を明確にし、質問を上手に構成することによって、回答から現実を見つけ出すことです。

【参考】事実を尋ねるための質問

- ① “What” “Who” “When” “Where”
- ② “How much?” “How did you come from?” など明確な答えが期待できる場合の “How”
- ③ 「～をしたことがありますか?」「～を知っていますか?」といった経験や知識を尋ねる質問

講座を終えて

本講座では、対話型ファシリテーションのコミュニケーション技能について、その導入部分を説明していただいたにすぎませんが、これは支援の現場に限られるものではなく、職場や家庭、学校生活でも応用できる内容です。講座の中で盛り込んだミニ・ワークショップでは、受講者同士が活発に議論しあう様子がみられ、講座



の最後には「事実質問を通じてニーズを汲み取る際、どう意識すれば成功するだろうか?」という質問があがりました。

受講者からは、「地域で活動しているが、地域で何が必要なのか、今日の講義を聞いて本当に大切なものが何かを考えることの大切さを学んだ」「実際のエピソードに基づいており、説得力・納得感がある。一つ視界が広がった。」「NGOの例は身に覚えのあるものばかり、日常でもいかせる内容だった」「国際化に関係なく、普通の生活・社会でも役に立つポイントだと思った」などの感想が多く寄せられました。